

安全保障と平和

松尾 雅嗣

平和科学研究センター

序

周知のごとく、平和学の研究領域は、ヨハン・ガルトゥング (Johan Galtung) の構造的暴力の議論を契機として、開発と貧困の問題に拡大した。他方、安全保障研究も、1990年代から、環境破壊などを新たに加える形で研究対象領域を拡大してきた。そして、国連開発計画の1994年版の提言 (UNDP 1994: 22-40) を機に、今や「人間の安全保障」が研究対象領域に加わったかに見える。

ふたつの学問分野におけるこのような研究対象領域の拡張は、当然のことながら、平和学と安全保障研究の大幅なオーバーラップ、クリースバーグ (Louis Kriesberg) の言葉を借りれば「合流」(convergence) (Kriesberg 2002) をもたらした。勿論、クリースバーグの指摘 (*ibid* 586) を俟つまでもなく、このふたつの研究分野の重なり合いは今に始まったことではない。そしてまた、一般にふたつの学問領域の研究対象が重なり合うことに格別の問題があるわけでもない。研究対象が仮に同じに見えても、通常は、厳密に言えば同一対象の異なる側面が研究関心の中心であり、それに伴って方法論も異なるからである。

しかしながら、平和学と安全保障研究の場合、事態はそう楽観できるものではない。このふたつの学問分野における上述の研究対象領域の拡張は、それぞ

れの分野における基本概念、即ち「平和」概念と「安全保障」概念、の拡張を前提としている。この両者が今日もし仮に大幅に重なり合うとするならば、固有の研究領域（少なくともそう見なされてきた）としての「平和学」と「安全保障研究」の境界が消滅することを意味するのではないか。このとき、果たして「平和学」と「安全保障研究」というふたつの学問領域を峻別する意義があるのであろうか。これが、本稿の問題提起である。

これを明らかにするためには、まず、このふたつの学問分野について、その拡張の過程を、基本概念に焦点を当てながら検討する必要がある。そしてその上で、「平和」と「安全保障」が概念的にどの程度重複するかを明らかにする必要がある。

1 平和概念の拡大

1960年前後に誕生した平和学（当時の呼称によれば、平和研究）は、「平和」を戦争の不在と定義し、戦争の原因と平和の条件を中心的研究課題とした。しかしながら、1970前後、ダスグプタ（Sugata Dasgupta）らの問題提起（Dasgupta 1968）を契機に、戦争を重視する「旧アジェンダ」支持者と構造的暴力を重視する「新アジェンダ」支持者の論争と対立が「平和学の第一の危機」を生み出した（Wiberg 1993: 10）。この論争に決着を付けたのが、構造的暴力概念を提起し、今や古典的となったガルトウングの論文である（Galtung 1969）。ただし、ガルトウングが展開したのは、正確には暴力の議論であって、構造的暴力のみを論じたわけではない。ガルトウングは、平和を、「戦争の不在」ではなく「暴力の不在」と定義し直すことによって、構造的暴力概念を導

いたのである。

ガルトゥングは、まず、平和を、従来の戦争の不在ではなく、暴力の不在であると定義する（Galtung 1969: 167）。暴力とは、人間に本来備わった肉体的精神的潜在的可能性の実現を妨げるものである。別の言い方をすれば、暴力とは、潜在的なるものと現実との、可能であったものと現にあるものとの、格差の原因と定義される。暴力とは、潜在的なるものと現実との距離を拡大するものであり、この距離の縮小を阻害するものである（Galtung 1969: 168）。そしてガルトゥングは、戦争の場合と異なり、行為者を特定しがたい社会構造に組み込まれた暴力を構造的暴力と呼んだのである。それは、社会的不正義とも呼びうる（Galtung 1969: 170-171）。

ガルトゥングは、かくして一方における戦争と、他方における貧困と開発を、統一的に理解する枠組を提供した。平和学は、この拡張された平和概念にもとづいて研究を進めることになる。平和学のこのような拡張は勿論問題なしとしないが、これについては後に述べることにして、ここでは、まず次の二点を確認しておきたい。

第一に、暴力の不在と定義される平和概念においては、戦争のみならず貧困（の克服）と開発もまたその重要な構成要素となるということである。何がどう拡大されたかに関しては、ケネス・ボールディング（Kenneth Boulding）のガルトゥング批判（Boulding 1978）が示唆に富む。既に述べたように、ガルトゥングは、戦争によるものであれ、貧困によるものであれ、人間の可能性の阻害に暴力の存在を見出した。彼の平和概念は、図1に図式的に示すように、人間の可能性の実現が阻まれるという結果の共通性を強調するものである。これに

対して、ボールディングは、現象と結果を生み出す過程と構造、あるいは原因に重点を置く。ボールディングによれば、結果の共通性は、原因の共通性を保証するものではなく、戦争という直接的暴力を生み出す構造と過程は、貧困という構造的暴力と生み出す過程と構造とは、何がしかの共通性を認めるにせよ、むしろ別個のものに見なすべきだからである。

構造的暴力論の受容は、当然ことながら、ジェンダー、環境問題など多くの課題を平和学の研究アジェンダに加えることになった。環境問題については、「平和研究のグリーン化 (greening of peace research)」 (Pirages 1991)、 「エコポリティクス」の平和学への定位 (placing ecopolitics in peace studies) (Kegley 1997) 、 「自然の平和の概念あるいは環境的正義 (notion of peace with nature or ecological justice)」 (Wenden 1995: 14)などの提唱や主張がその例である。

第二に、ガルトゥングの提起した暴力の定義、即ち、人間のもって生まれた肉体的精神的可能性の実現を阻むものという定義は、その後の安全保障や人間開発の議論に装いを代えてしばしば現われることになるということである。安全保障の議論に関しては、後にやや詳しく述べるが、ここでひとつだけ例を挙げよう。坂本義和によれば、戦後国際社会、特に国連において、3つの基本的な価値、つまり戦争の不在としての「平和」と、「開発」と、「人権」の意味づけが変わってきた。当初、「開発」と「人権」(の確保)は、「平和」を実現するための条件ないしは手段であったが、最終的には、「平和」も「開発」も、「人権」実現のための、手段と見なされるようになった。しかも、この「人権」は条約や実定法上の意味ではなく、より全人的な、「人間が人間らしく生きる権利」とも呼ぶべきものである (坂本 1990: 241-250)。この意味での人権

は、構造的暴力の（部分的にせよ）廃絶された状態ときわめて近くなる。また、坂本自身が「国家の安全」から「人類の安全」へという表現を用いていること（*ibid*: 253-254）からも窺われるように、「人間の安全保障」概念との親近性もきわめて高い。

この結果、今日平和学の目的は、「[直接的]暴力の防止と人間の福利の増進の可能性」(Jeong 1999: 6)を探ることであるとされるに至ったのである。ここで言う「人間の福利の増進」には、経済発展、環境保全、社会正義の実現が含まれる。一言して言えば、人間のもって生まれた可能性の実現を増進することが平和学の目的となった。

平和学の研究対象のこのような拡大が、批判を生み出さなかったわけではない。例えば、西欧が中距離核兵器の配備問題で揺れた80年代初頭、「われわれの社会の戦争遂行能力ではなく構造的暴力に目を奪われて、われわれは真の目標を見失っていた」(Krippendorf 1981: 109)という声が上がった。「平和研究はあまりに多方面に発展し、いまや個人の能力を超えてしまった」(Wiberg 1981: 147)と言われたのもほぼ同じ頃である。平和学が「あらゆる社会問題を吸い込むブラック・ホール」(Wiberg 1993: 10-11)という批判が存在することは否定できない事実である。

2 安全保障概念の拡大

前節に略述した概念の広義・狭義の論争は、安全保障研究にも見ることができ(1)。

詳細は割愛するが、まず1970年代には、ガルトウングの議論と並行するか

のように、安全保障概念の拡張を主張する流れが現れる。この時期、依然として国家の安全保障が対象ではあるが、経済の問題だけでなく、エネルギー、科学技術、食料、天然資源をも安全保障の対象に加えるべきとする議論が現れる。大平首相時代の「総合安全保障」概念もこの流れに位置づけられる（中西 2001: 54-56）。この流れは、80年代にはさらに加速する。

例えば、マシューズ（Jessica Touchman Mathews）は、1970年代に国家安全保障概念が拡張されて国際経済を含むようになったと同様、資源や、環境や、人口問題を射程に収める必要があると論ずる（Mathews 1989: 162）。マシューズの議論は、資源や環境の問題を国家安全保障の問題として考えるものであるが、脅威の源泉は従来のように主として国家の外に存在するわけではない。マシューズは、具体的には、土壌の悪化、砂漠化、水産資源の枯渇に代表されるような再生可能な資源の枯渇、そしてこれらの資源の枯渇がもたらす、人口問題、具体的には難民と大量の人口移動（Mathews 1989: 164-168）を安全保障の問題として認識する必要性を説く。このような人口と資源の動向に対処しなければ、それがもたらす経済的停滞は、不満や、憤慨や、国内不安や、内戦にさえ至る（Mathews 1989: 167-168）からである。ウルマン（Richard H. Ullman）の議論も同様に、国家安全保障に対する非軍事的脅威を強調するものである（Ullman 1983: 129, 133）。この時期の概念の拡張は、国家安全保障や国際安全保障への非軍事的脅威を強調するものであったと言えよう⁽²⁾。この間の議論は、後に掲げるパリス（Roland Paris）の分類に従えば、「国家安全保障」から「拡張安全保障」への流れと解することができる。（表1参照）

この後、概念拡張の流れが本格化する。「拡張派」は安全保障研究が非軍事的

な脅威の源泉と国内安全保障問題をも研究対象とすることを主張し、「伝統派」は伝統的な軍事と軍事力の行使に対象を限定することを主張する (Buzan et al 1998: 1-2, Shultz et al 1997: 1-2)。拡張派の言う非軍事的な脅威の源泉には、環境破壊、資源の枯渇、国際資本移動による国内経済への打撃、麻薬取引のような組織犯罪、大規模な人権侵害、人口爆発、難民と無制限な人口移動、伝染病などが含まれる (Patman 1999: 4, Roy 1997: 2)。このような研究対象の拡張に対して、「重大な国内、国際問題がすべて安全保障の問題とされることによって [研究領域が] 拡散し、希薄化する」(Shultz et al 1997: 3)、「人間の福利の減少をもたらすすべてのものが安全保障に対する脅威であるとされるならば、安全保障なる概念は分析上の意義をもたなくなる」(Deudney 1991: 24)といった批判の声が上がるのは、ある意味では当然である。拡張を支持するブザン (Barry Buzan) ですら、安全保障研究が国際関係研究一般と区別がつかなくなることに懸念を表明している (Buzan 1992: 483)。

賛否はともかく、拡張された意味での「安全保障」が「脅威からの自由 (freedom from threat)」(Buzan 1992: 484) や、「安全と生存の感覚の必要 (need for feelings of safety and survivability)」(Kegley 1997: 439) を意味することは容易に理解される。この点で最も極端なのは、ブース (Ken Booth) の議論であろう。ブースは、「解放 (emancipation)」が安全保障理解の鍵概念であるとする。ブースによれば、「解放」とは、人々を戦争、貧困、抑圧、教育機会の喪失といった制約から解き放つことに他ならない (Booth 1991: 539)。しかも、「解放 (emancipation)」が謳われるのは、安全保障研究の側からのみではない。平和学の文献においても同様の主張を見ることができる (Alker 1988: 220, Patomäki

2001: 731, 733)。ここにもふたつの研究分野の重なりを見ることができる。

ここで確認したいのは、このような拡張された安全保障概念と、既に見た平和学における平和と暴力の概念、坂本の言う人権の概念との共通性である。詳細に吟味すれば、多くの差異を列挙することは可能であろう。しかしながら、ここで強調したいのは、そのような細部の相違ではなく、重要部分の共通性である。これまでに述べたふたつの学問領域の拡張結果がもたらす研究対象領域あるいは研究アジェンダの類似性を図式的に示すとすれば、図2のようになるか。

この図が共通性を意識的に強調したものであることは否定しないが、広義の平和学と安全保障研究における「人間の福利」と「人間の可能性の実現」をどのような言葉で置き換えようと、ふたつの学問領域の重なり合いを無視することは困難であろう⁽³⁾。

図2に示されるような結果の類似性は、ボールディングの言葉として引用したように、原因や経過の類似性を必ずしも意味しない。実際、安全保障概念の拡張においてすら、環境問題に関する二つの異なった流れの合流と見る見解(蓮井 2002:72-75)もある。平和学の場合、狭義と広義の対立の軸は、現象や結果の共通性に着目するか、原因や過程の差異に着目するかにあった。これに対して、安全保障研究の場合は、二つの対立軸が存在すると思われる⁽⁴⁾。ひとつは、所謂安全保障の客体もしくは受益者(referent)についての対立軸である。狭義の国家の安全保障と広義の人間あるいは人類の安全保障の対立である。国家対個人というこの対立軸は、個人の安全に関する近代西欧におけるホッブズの現実主義対ロッキンの自由主義の対立の再現(中西 2001: 25-30)と見ること

もできよう。

他のひとつは、安全保障に対する脅威に関する対立である。狭義の安全保障にとっては、軍事的脅威が、唯一のではないにしても、最も重要な脅威であるが、広義の安全保障を脅かすものは、多くの非軍事的要因である。

このような安全保障概念の拡張の流れを最も明確に示したのは、表1に示すパリスの要約であろう。

安全保障概念の議論で、平和概念の議論と異なるのは、このように安全保障の受益者、安全を誰が保障するのかという意味での安全保障確保の主体、安全保障を脅かすものとしての脅威といった構成要素のレベルでの議論が盛んに行われていることであろう。上に掲げるパリスの類型化もその例である。また、伝統的の国家安全保障と人間の安全保障に関する、表2のような主体、受益者、脅威の源泉などによる来栖薫子の区分も同様の試みである。ブザンらのように、安全保障分析の単位として、脅威を受ける対象（国家における生存、民族におけるアイデンティティなど）、脅威の認識者といった区分を設ける（Buzan et al 1998: 35-36）⁽⁵⁾ことも可能であろう。

ブザンの1984年の「平和、パワー、安全保障：国際関係研究における競合する諸概念」と題する論文（Buzan 1984）は、人間の安全保障や、安全保障概念の拡大を直接に論じたものではないが、ここで注目すべきは、個人、国家、（国際）システムという所謂3つの分析レベルに共通する行動の動機として、「不安全」（insecurity）、即ち安全保障の欠如ないしは喪失の不安、が提示されていることである。動機の強調は、多くの議論が、他の要因を強調することと対照的である。

3 環境紛争と人間の安全保障

上述のように、安全保障研究と平和学というふたつの研究領域における安全保障概念と平和概念は、今日合致の度をますます高めていると言ってよいであろう。確かに、中西寛の指摘するように、古代ローマ以来「安全保障」は「平和」を含意してきたし、このふたつはしばしば等値あるいは並置されてきた（中西 2001: 21-22）。このことを考えれば、現在の状況は当然のことと見なしうるかもしれない。また、クリースバーグのように、平和学と安全保障研究にはかつて重要な差異があったとしても、リチャードソン（Lewis Richardson）やライト（Quincy Wright）のように両者を架橋した研究者が存在したことを指摘する論者もある（Kriesberg 2002: 584-586）。後述のようなブザンの早い試みもある。

ここでは、安全保障研究と平和学の合流をふたつの事例について若干立ち入って検討する。ひとつは、平和学の側からする合流の議論であり、他のひとつは所謂「人間の安全保障論」である。

まず平和学の側からの議論を検討してみよう。多くの議論が、平和学と安全保障研究の合流やオーバーラップを直接にあるいは明示的に論じているわけではない。しかし、論理的含意と帰結は明かである。一般には、ある現象や問題が、例えば環境破壊が、人間の福利に対する脅威であり、そしてそれゆえに広義の安全保障の問題であり、従って、当該の問題は平和学の研究対象であると主張される。例えば、「人類と地球生態系の維持能力の関係が人間の苦痛の重要な要因に、そして紛争と窮乏の新たな源泉となりつつあるから、平和学は地

球環境の維持に更なる関心を払うべきである」(Pirages 1991: 129, 132) という議論がそれである。この種の論理の背景には、安全保障はあるいはそれに対する脅威は、ボールディング (Elise Boulding) などの議論に見られるように (Balász 1993: 8, Boulding 1992: 3-4)、平和学の研究課題であるという前提が存在する。広義の安全保障は平和学の課題であることが前提にされているのである。

ここでは、環境安全保障の問題を取り上げてみよう。環境問題を平和学の研究対象とする議論には、実はふたつの流れがある。ひとつは、資源の枯渇を含む環境破壊が暴力的紛争の原因となるがゆえに、平和学の課題であるという主張である (Homer-Dixon 1994, Howard 1997: 64, Kegley 1997: 439 など)。資源・環境と (国内武力) 紛争の関係を最も明示的にモデル化したのは、ホーマー・ディクソン (Thomas Homer-Dixon) であろう。資源の枯渇から紛争に至るプロセスは、図3のようにモデル化される。ホーマー・ディクソンらのモデルに対しては、経験的論証に欠けるなどの批判もある⁽⁶⁾がここでは触れない。また、彼らのモデルは、環境破壊一般ではなく、再生可能な資源の枯渇が紛争の発生に重要な役割を果たすという意味で、環境紛争というよりもむしろ資源紛争モデルと呼ぶべきであろうが、この点もここでは割愛する。

資源と環境の問題との直接の関連を論拠とするわけではないが、クリースバーグも、冷戦後における国内武力紛争の重要性の認識が、両者の合流をもたらしたと論じている。具体的には、武力紛争の諸段階を射程に収める、予防、エスカレーション、解決、紛争後の復興・和解と平和構築などの領域がそれである (Kriesberg 2002: 589-591)。

このような議論は、どの受益者あるいは客体に焦点を当てるかは別として、軍事ないしは直接的暴力の問題を重視する狭義の平和学と安全保障研究の枠組に比較的容易に合致する。前掲表 1 の枠組で言えば、パリスの言う国内安全保障の領域に該当する問題である。軍事的脅威が国家安全保障のみならず国内安全保障の深刻な脅威にもなっているという認識を反映する議論であると言える。平和学においても、近年主要学術誌が国内紛争を含めた武力紛争を論ずる論文を多く掲載するようになったこと、相当数の論者が平和学の研究対象を地域紛争を含めた紛争の問題としている（Boulding 1992: 2, Tromp 1992: 12）こともまたこのような流れを示すものである。

これに対して直接間接に武力紛争の原因にならないとしても、人間生活を損なうときあるいはその恐れのあるとき（Gleditsch 2001: 62）、あるいは人間の苦しみや悲惨をもたらすもの（Pirages 1991: 129）として、環境問題を平和学のアジェンダに組み込むべきであるという見解もある。この議論は、広義の平和概念に合致するものである。もし環境破壊が人間の福利の低下をもたらすのであれば、ガルトウングの定義からしてこれは暴力であり、平和学の当然の研究対象だからである。

次に、「人間の安全保障」を検討してみよう。この概念が国連開発計画（UNDP）の 1994 年の年次報告『人間開発報告 1994』によって提唱されたことはよく知られている。人間の安全保障に関しては、その後膨大な文献が蓄積され、最近でも 2003 年には緒方貞子とアマーティア・センを共同議長とする報告書も出されている。しかし、ここでは 1994 年 UNDP 報告に立ち返って議論を進める。同報告書によれば、人間の安全保障概念は、次の二点

をとりわけ強調するものである。

国家の安全保障ではなく、人々の安全保障

軍備による安全保障ではなく、持続的人間開発による安全保障

(UNDP 1994: 24)

報告は、人間の安全保障を構成する主要な領域として、(1) 経済的安全保障 (例えば、貧困の克服) (2) 食糧安全保障 (食糧へのアクセス) (3) 健康の安全保障 (医療へのアクセス、疾病からの保護) (4) 環境安全保障 (環境破壊や資源枯渇からの自由) (5) 身体的安全保障 (拷問、戦争、犯罪等からの肉体的安全) (6) 共同体の安全保障 (伝統文化とエスニック集団の存続) (7) 政治的安全保障 (市民的政治的自由の享受、政治的抑圧からの解放) という 7 つの領域を挙げる (UNDP 1994: 24-33)。一言で言えば、人間の安全保障とは、「安定した雇用・所得・健康・環境・治安を確保し人びとの安全を守ること」(来栖 2001: 116) と定義されよう。

人間の安全保障概念に関しては、これ以後批判⁽⁷⁾を含む多くの議論があり、それをここで検討する余裕はないが、人間の安全保障を主張する論者は、戦争や武力紛争などの (主として国内的な) 軍事的脅威を重視する「許容化原理」にもとづく「人道の危機」限定派と、より豊かで文明的な生活を目標とする「最大化原理」にもとづく「広義肯定派」に、に大別されること (来栖 2001: 119, 141) を確認しておきたい。前者は、軍事的脅威を重視する点で表 1 の国内安全保障とも言うべき領域に相当し、伝統的平和学、安全保障研究との親和性はきわめて高い。これに対して、後者は「人間の潜在的可能性の十全な実現」という言葉 (Paris 2001: 91 に引用) を使用する論者もいるほどに、構造的

暴力（の廃絶された状態を示す）概念との親和性が極めて高い。

以上略述したように、環境紛争の問題も人間の安全保障の問題も、狭義に解するにせよ広義に解するにせよ、平和学と安全保障研究の合流を明らかに示す。前掲の図2においては、ふたつの研究領域の独立性が維持されたまま研究対象が融合するというイメージが提供されたが、両者の境界が消失しつつある図4のようなイメージが現実をより忠実に反映するものであるかもしれない。

仮に、平和学と安全保障研究が、融合とは言えないまでも、この図式の示すように非常に近いものであるとするならば、研究者はこれに如何に対処すべきであろうか。広義の立場に立つならば、平和学の目標は最大肯定派の人間安全保障論者の目指すものよりはるかに高度な、人間の可能性の十全の実現であるとして、差異を強調することも不可能であるまい。他方、重要なことは研究成果とそれが今日の世界が直面する問題にどのように寄与できるかということであり、研究分野の名称など二義的な問題に過ぎないということもできる。例えば、来栖のように「安全学」あるいは「人間の安全のためのガバナンス」（来栖2001: 120-121, 142）といった名称を考えることもできよう。

いずれにせよ、ふたつの学問領域が、ボーダレスとは言えないまでも、ポラスになったことだけは否定できない。そして、このことは常に念頭に置く必要があるのではなからうか。

平和概念と安全保障概念の関連が論じられるのは近年に始まったことではない。ブザンの前述1984年論文は、公表された時期からしてある意味では当然のことであるが、人間の安全保障を論じたものではない。むしろ、伝統的な意味での軍事安全保障を論じたものであると言える。彼の議論の主意は、国際

関係における最大の問題である戦争の問題に対するふたつのアプローチ、即ち権力概念に代表される現実主義と平和概念に代表される理想主義のいずれもが戦争の問題に関して不十分な理解しかもたらさないとして、この両者を統合する概念を提起することにある。この両者に代表される国際関係の問題の根源には「不安全」(insecurity) の問題がある。この「不安全」を如何にして克服するか、換言すれば「安全保障」を如何にして担保するかという問題が戦争の問題の根源にある。そして、「不安全」の問題は、ケネス・ウォルツ流の、個人、国家、国際システムという3つのレベル(Waltz 1959) のいずれにも存在する。現実主義は、あまりにも国家の利害に目を奪われすぎて、システム全体の利益や個人の安全の問題を無視してきた。これに対して、理想主義は、対照的にシステム全体の利益と個人の安全を強調するあまり、国家の利害、具体的には軍備という、アナーキーの状況の下における国家の必要性、を過小評価してきた。それゆえに、この両者を包摂する「安全保障」という概念が必要であると、ブザンは結論する。蓋し、問題の根源には「不安全」があるからである。

ブザンのこの議論は、戦争の問題、前掲のパリスの分類に従えば、もっぱら伝統的な軍事安全保障の問題を論じたものである。しかしながら、ブザンの議論は、われわれの当面の課題を理解する際に大いに参考になる。彼の言う「現実主義」を「伝統的軍事安全保障」あるいは同じことではあるが「国家安全保障」と置き換え、「平和主義」を(人間の安全保障を含む)「新しい安全保障」あるいは「拡大安全保障」と置き換えてみれば、その意味は明らかであろう。

既に述べたように、「伝統的安全保障」研究が、軍事安全保障を核とする国家安全保障の研究であったことは明らかである。他方、「新しい安全保障」が

これと対照的に、システム全体あるいは個人の、特に個人の安全保障を強調することも既に述べたとおりである。システムの全体益を重視する視点として、地球環境問題を安全保障のアジェンダに組み込む主張は既に見た。また個人を重視する立場として、「人間開発報告」が、「国家中心的な」安全保障観から脱して個人を安全保障の最大の受益者とすべきであると宣言したことも周知のことである。ブザンは、拠って立つ立場は別として、この両者を包摂する概念として「安全保障」を提唱したのである。

このような提言をも念頭に置きつつ、「平和」概念を再構築することが今求められているのではあるまいか。

註

- 1 平和学における論争と安全保障研究における論争の共通性を指摘した最も早い例のひとつは、ヴィーベリ (Wiberg 1992: 492, note 5) であろう。
- 2 環境問題を国家安全保障の問題として扱うことに対する批判としては、Deudney 1991: 26-28 などを参照。デュードニーの批判は、環境問題を国家安全保障の問題とすることは、その解決を国家と軍に委ねることになるからであるというものである (Deudney 1991: 28)。
- 3 例えば、来栖薫子も人間の安全保障概念と構造的暴力概念の共通性を指摘している (来栖 1998: 91)。
- 4 ふたつの対立軸に関する同様の見解は、Dupont 1997: 31 にも見られる。
- 5 但し、両者の区別は困難であるとされる。また、彼らの言う主体は、安全保障に対する脅威を認識する主体であって、安全保障を確保する主体ではない (Buzan et al 1998: 36)。
- 6 例えば、ディール (Paul Diehl) やグレディッチ (Nils Petter Gleditsch) は、ホーマー・ディクソンらの研究は、少数の事例にもとづく検証に過ぎず、しかも武力紛争に至った事例のみが選択されており、環境要因が紛争をもたらすか否かという命題を検

証するものではないと批判する (Diehl 2002: 15-16, Gleditsch 2001: 55-56)

- 7 人間の安全保障概念については、その曖昧さを批判する見解が多いが、ここでは人間の福利、文化、教育までを安全保障の対象とすべきだとする「広義肯定派」に対する、「(もしそうだとすれば)人間の安全保障の対象にならないものがあるだろうか」(Paris 2001: 91-92)という批判のみを挙げておく。また、「安全保障」や「人間の安全保障」なる用語の採用に政治的意図を読み取る議論 (Deudney 1991: 24, Gelditsch 2001: 53-54, Paris 2001: 88) 「人間の安全保障」なる言説が排除の論理として機能する逆説 (土佐、2003) なども参照。
- 8 既に見たように、人間の安全保障概念には、大雑把に言えば国家と個人の間中間的存在としての「集団」や「共同体」も包摂されるが、この点はここでは立ち入らない。

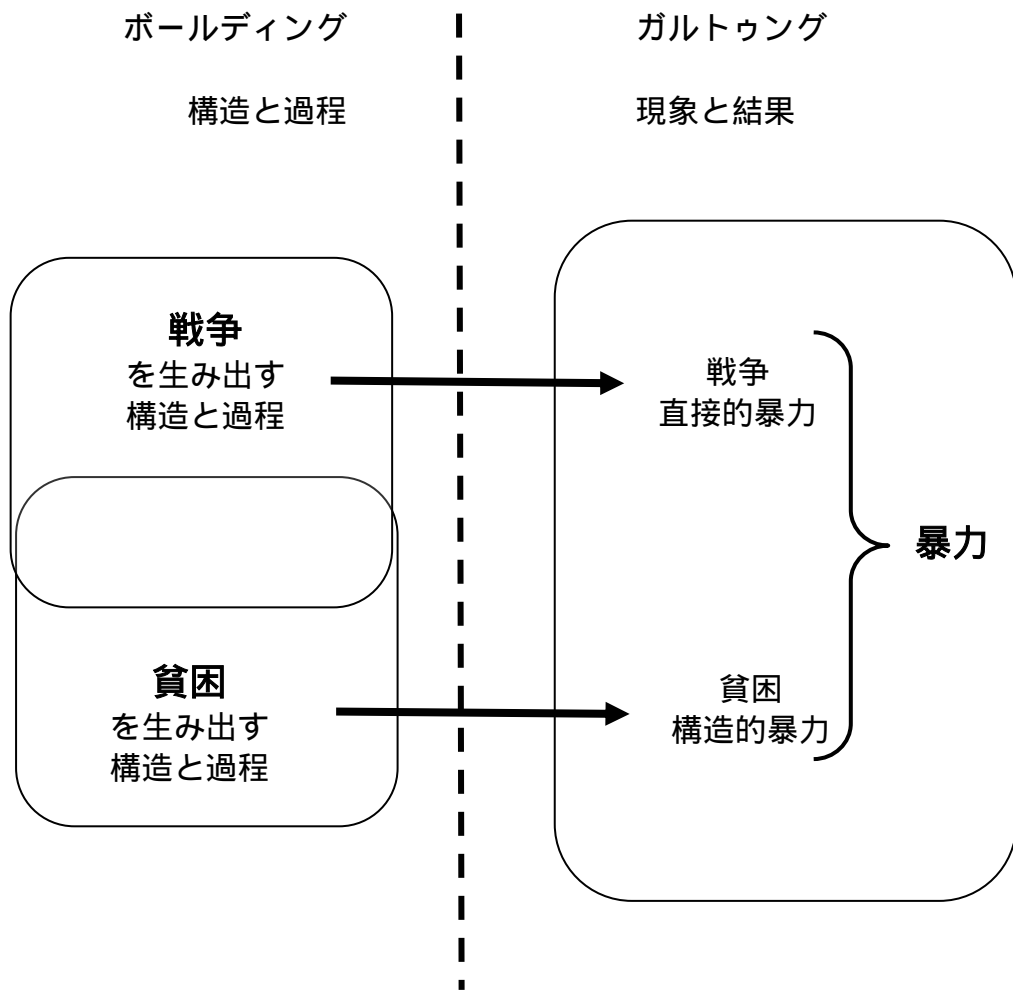
引用文献

- Alker, Hayward R. Jr. (1988), "Emancipatory Empiricism: Toward the Renewal of Empirical Peace Research," Peter Wallensteen (ed.), *Peace Research: Achievements and Challenges*, Boulder: Westview, 219-241
- Balázs, Judit (1993), "Introduction," Balázs and Wiberg (eds.), 7-8
- Balázs, Judit and Håkan Wiberg (eds.) (1993), *Peace Research for the 1990s*, Budapest: Akadémiai Kiadó
- Booth, Ken (1991), "Security in Anarchy: Utopian Realism in Theory and Practice," *International Affairs*, 63(3), 527-545
- Boulding, Elise (1992), "Introduction: What Is Possible?" Boulding (ed.), 1-6
- Boulding, Elise (ed.) (1992), *New Agendas for Peace Research: Conflict and Security Reexamined*, Boulder: Lynne Rienner
- Boulding, Kenneth E. (1977), "Twelve Friendly Quarrels with Johan Galtung," *Journal of Peace Research*, 14 (1), 75-86
- Buzan, Barry (1984), "Peace, Power, and Security: Contending Concepts in the Study of International Relations," *Journal of Peace Research*, 21(2), 109-125
- Buzan, Barry (1992), "Response to Kolodziej," *Arms Control*, 13 (3), 480-486
- Buzan, Barry, Ole Waever and Jaap de Wilde (1998), *Security: A New Framework for Analysis*, Boulder: Lynne Rienner
- Dasgupta, Sugata (1968), "Peacelessness and Maldevelopment: A New Theme for Peace Research in Developing Nations," *Proceedings of the International Peace Research Association Second Conference*, Assen, The Netherlands: Koninklijke Van Gorcum & Comp, vol.2, 19-42

- Deudney, Daniel (1991), "Environment and Security: Muddled Thinking," *Bulletin of the Atomic Scientists*, 47(3), 22-28
- Diehl, Paul F. (2002), "Chasing Headlines: Setting the Research Agenda on War," *Conflict Management and Peace Science*, 19(1), 5-26
- Dupont, Alan (1997), "New Dimensions of Security," Roy (ed.), 31-50
- Galtung, Johan (1969), "Violence, Peace, and Peace Research," *Journal of Peace Research*, 6(3), 167-191
- Gleditsch, Nil Petter (2001), "Resource and Environmental Conflict: The-State-of-the-Art," E. Petzold-Bradley et al (eds.) (2001), *Responding to Environmental Conflicts: Implications for Theory and Practice*, Dordrecht: Kluwer Academic, 53-66
- 蓮井誠一郎 (2002) 「環境安全保障: 「人間の安全保障」の再検討に向けて」、『平和研究』, 27, 69-79
- Homer-Dixon, Thomas F. (1994), "Environmental Scarcity and Intergroup Conflict," Michael T. Klare and D. C. Thomas (eds.) (1994), *World Security: Trends and Challenges for a New Century*, 2nd ed, New York: St. Martin's, 290-313
- Howard, Philip (1997), "Environmental Scarcities and Conflict: Assessing the Evidence in the Asia-Pacific Region," Roy (ed.) (1997), 64-75
- Jeong, Ho-Won (1999), "Peace Research and International Relations," Ho-Won Jeong (ed.) (1999b), *The New Agenda for Peace Research*, Aldershot: Ashgate, 3-11
- Kegley, Charles Jr. (1997), "Placing Global Ecopolitics in Peace Studies," *Peace Review*, 9(3), 425-430
- Kriesberg, Louis (2002), "Convergence between International Security Studies and Peace Studies," Michael Brecher and Frank Harvey (eds.) (2002), *Realism and Institutionalism in International Studies*, Ann Arbor: University of Michigan Press, 584-597
- Krippendorff, Ekkehart (1981), "Focus on: Peace, an Introduction," *Journal of Peace Research*, 18 (2), 109-110
- 来栖薫子(1998), 「人間の安全保障」、『国際政治』, 117, 85-102
- 来栖薫子(2001), 「人間の安全保障 - 主権国家システムの変容とガバナンス」, 赤根谷達雄・落合浩太郎(2001) (編著) 『「新しい安全保障論」の視座』, 東京: 亜紀書房, 113-149
- Mathews, Jessica Touchman (1989), "Redefining Security," *Foreign Affairs*, 68(2), 162-177
- 中西寛 (2001) 「安全保障概念の歴史的再検討」, 赤根谷達雄・落合浩太郎(2001) (編著) 『「新しい安全保障論」の視座』, 東京: 亜紀書房, 19-67
- Paris, Roland (2001), "Human Security: Paradigm Shift or Hot Air?" *International Security*, 26(2), 87-102
- Patman, Robert G. (1999), "Security in a Post-Cold War Context," Robert G. Patman (ed.), *Security*

- in a Post-Cold War World*, Houndmills and London: Macmillan, 1-12
- Patomäki, Heikki (2001), "The Challenge of Critical Theories: Peace Research at the Start of the New Century," *Journal of Peace Research*, 38(6), 723-737
- Pirages, Dennis Clark (1991), "The Greening of Peace Research," *Journal of Peace Research*, 28(2), 129-133
- Roy, Denny (1997), "Introduction: Old and New Agendas," Roy (ed.) (1997), 1-4
- Roy, Denny (ed.) (1997), *The New Security Agenda in the Asia-Pacific Region*, Houndmills and London: Macmillan
- 坂本義和 (1990) 『地球時代の国際政治』、東京：岩波書店
- Shultz, Richard H. Jr. et al (1997), "Introduction," Richard Shultz et al (eds.), *Security Studies in the 21st Century*, Washington: Brassey's, 1-12
- 土佐弘之(2003) 「「人間の安全保障」という逆説 - <恐怖からの自由>と<他者への恐怖>」土佐弘之(2003) 安全保障という逆説、東京：青土社, 109-138
- Tromp, Hylke (1992), "Peace Research at the End of the Cold War," Boulding (ed.), 9-12
- Ullman, Richard H. (1983), "Redefining Security," *International Security*, 8(1), 129-153
- UNDP (1994), *Human Development Report 1994: New Dimensions of Human Security*
- Waltz, Kenneth N. (2001, 1959), *Man, the State and War: A Theoretical Analysis*, New York: Columbia University Press
- Wenden, Anita L. (1995), "Defining Peace: Perspectives from Peace Research," Christina Schäffner and Anita L. Wenden (eds.), *Language and Peace*, Aldershot: Dartmouth, 3-15
- Wiberg, Håkan (1981), "JPR 1964 - 1980 - What Have We Learnt about Peace?" *Journal of Peace Research*, 18 (2), 111-148
- Wiberg, Håkan (1992), "(Re-)Conceptualizing Security," *Arms Control*, 13 (3), 487-492
- Wiberg, Håkan (1993), "European Peace Research in the 1990s," Balázs and Wiberg (eds.), 9-25

図1 戦争と貧困



現象として現われた結果に着目すれば、暴力という概念によって人間の可能性が損なわれる状況を統一的に理解できる。

結果を生み出す原因に着目すれば、結果を生み出す過程や構造が重視されることになり、戦争を生み出す原因と貧困を生み出す原因を分けて考えるという立場が成り立つ。

図2 平和学と安全保障研究の研究对象領域

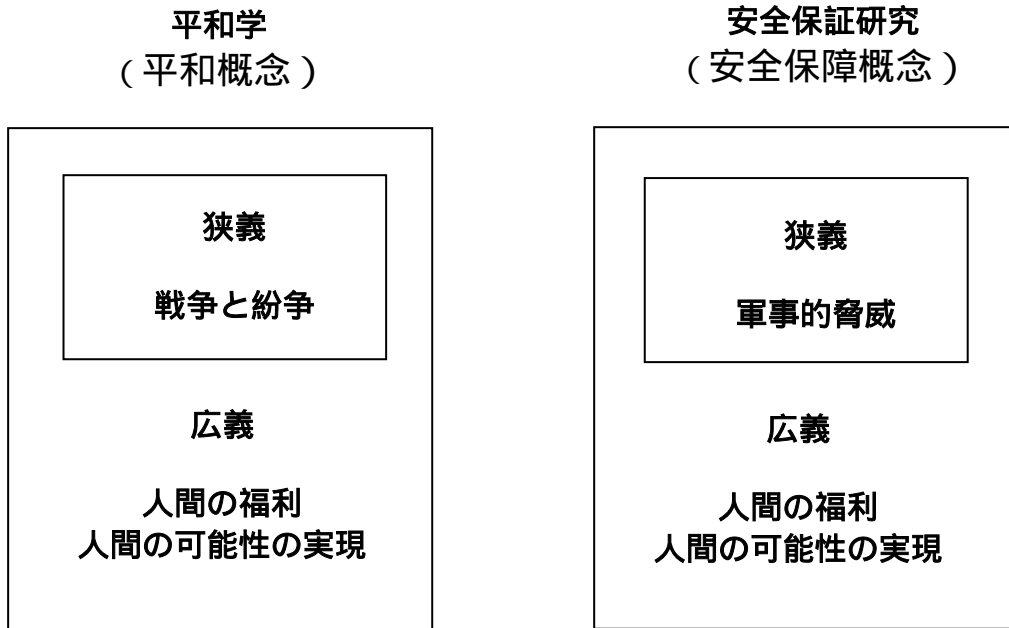


表1 安全保障：受益者と脅威の源泉

出所： Paris (2001), 98 に加筆

		脅威の源泉	
		軍事	軍事、非軍事 あるいは双方
受益者	国家	国家安全保障 伝統的現実主義 アプローチ	拡張安全保障 環境安全保障、経済 安全保障など
	社会 集団 個人	国内安全保障 内戦、民族紛争、 民衆虐殺	人間の安全保障 社会、集団、個人の 生存に対する環境や 経済の脅威

表2 安全保障の主体、客体、脅威の源泉

出所：来栖 2001, 131 図1より抜粋

	主体	客体	脅威の源泉
伝統的的国家安全保障	国家	国家(国民)	国外/軍事的
人間の安全保障	国家 非政府主体 国際機構	人びと	戦争/内戦 難民化 飢餓、貧困 人権抑圧 環境破壊

図3 資源枯渇と武力紛争

出所：Homer-Dixon (1994), 302

資源枯渇の要因

社会的帰結

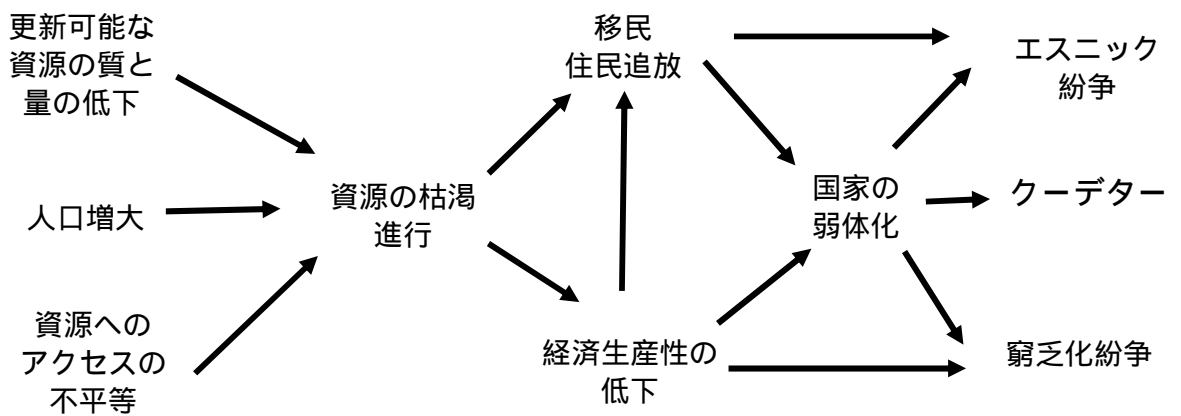


図4 平和学と安全保障研究の研究对象領域

平和学

安全保障研究

平和概念=安全保障概念

